

**“Encouragement of Writing from Left to Right
(or Academic Work)” Heisei Edition: Using “I” Novel:
from Left to Right by Minae Mizumura as a Lead**

Toru Fukazawa

A novelist and essayist, Minae Mizumura wrote, in her essay *The Fall of Language in the Age of English*, that the true state of affairs would not be changed in academic work whatever language scholars used for their papers, but that it would be changed in literature, depending on the language authors used for their works. In this situation, scholars must choose naturally the more versatile language, which is English for the time being. Under such pressure to use English, Mizumura tries to find a means of protecting the Japanese language in literature.

However, the idea that any language can express the same state of affairs in academic work is derived from phono-logocentrisme, which was criticized by Jacques Derrida. Against the backdrop of this phono-logocentrisme, policies concerning the Japanese language were carried out after WWII, supported by the Far Eastern Commission, which has led to the present-day conception that the true state of affairs in writing is not affected regardless of whether it is written vertically or laterally.

In this article, I focus on performances in the humanities, which serve as a medium between academic work and literature, without separating them distinctly as did Mizumura. I criticize phono-logocentrisme deeply rooted among people today by requiring them to practice writing vertically in performances in the humanities.

平成版「横書^{がくもん}ノス、メ」

——水村美苗著『私小説 from left to right』を手がかりに——

深 沢 徹

ニュースピークは二〇五〇年頃までに、結局は旧語法^{オールドスピーク}（或はわれわれのいう標準英語）に取って代わるべきものと期待されていたのである。この間にニュースピークは着実に普及して、全黨員は日常会話にも益々ニュースピークの単語や文法的構文を用いる傾向が出て来た。一九八四年に使用されていた表現、またニュースピーク辞典第九版、第十版に収録されていた言語形態はいわば暫定的なものであり、多数の不用な単語や古い文体を含んでいて、それは後日、廃棄処分となる予定になっていた。

（ジョージ・オーウェル『一九八四年』^{（1）}）

一、「タテ書き」と「ヨコ書き」のはざまで

水村美苗の小説『私小説 from left to right』（一九九五年刊）は、二つの点で特異である。まずはそのタイトル。ジャンル名としての「私小説」をあえて名乗ることで、日本に特異なその小説形態を、意図的になぞってみせる。先に『續明暗』（一九九〇年刊）を、漱石の文体そっくりに真似て書いて見せた手際を思わせる。メタ・フィクションとしての特質が、そのネーミングからおのずと浮かび上がる。⁽²⁾

二つ目はその書式。なんとこの小説は「ヨコ書き」で印刷されている。「ヨコ書き」小説といえば通常は西欧からの翻訳小説のこと。それを日本語に移し替え、訳し替えたならば、「タテ書き」にされるのがあたりまえ。なのにこの小説は、日本語で書かれていながら、「ヨコ書き」なのである。

もつともこれには、ただし書きが要る。「会話に私の十倍くらいの英語が入ってくる」、しかも「品の悪い常套句を乱発し、タフな女という役柄を演ずるのに興を覚えている」（二六頁）姉の奈苗との電話口での応対、それがこの小説の大枠をかたちづくる。ために英語のフレーズが頻繁に現われてくる。これを通常の「タテ書き」書式に倣って、逐一ヨコに寝かせていては、かえって読みづらい。

いや理由はそれだけではない。この小説の主題は、「タテ書き」書式の日本語と、「ヨコ書き」書式の英語との対立抗争にあり、通常は「タテ書き」される日本語の小説を、あえて「ヨコ書き」にすることで、「タテ書き」書式に安住し、それを当然視して少しも疑わない日本人読者の、あまりの危機感のなさに、警鐘を鳴らす意図がみてとれる。⁽³⁾

そのタイトルに、「私小説」のジャンル形式を模し、それを意図的にまね、あざとく演じてみせる作爲の跡が見てとれるとするなら、「ヨコ書き」書式を用いたその理由は、副題に付された from left to right のフレーズに示される。たとえばこんなエピソードをともなうて。

英語が鳥のさえずりにしか聞こえなかった最初のころは、学校の休み時間はもとより、授業中もかまわずに日本語で小説を読んでいた。あの日も没頭して読んでいるうちに、いつのまにか休み時間になっていたのだらう。

（『私小説』一一五頁）

このとき少女の美苗が没頭して読んでいたのは、明治の女流小説家樋口一葉の『にぎりゑ』であった。日本語で書かれたその本を、ジュニア・ハイスクールのクラスメートに横取りされ、みなに冷やかされる。そこに生意気な男の子たちも加わって、「They don't read from left to right. They read from top to bottom」と騒ぎ立てる。その言葉をそのままに、この小説の副題が選ぴとられており、あとにはこんな文章が続く。

いづれにせよその場にいた級友たちの想像している物語から、一葉の、哀しい、にぎりゑの匂いの漂うような文章はあまりに遠く隔たっており、私は自分の英語がいくら流暢になったところで、この隔たりが埋め尽くされようとはとても思えなかったのであった。

（『私小説』一一七頁、ただし傍点引用者）

ここにいう「隔たり」が、「ヨコ書き」の英語と「タテ書き」の日本語とのあいだのそれであることはいうまでもない。だがテキストを丹念に読み解いていくなら、もうひとつ別の「隔たり」の隠されていることに気づかされる。

二、「遅れ」が「最先端」へと転ずるアイロニー

続けて同じ教室での出来事。本のページに唯一読めるアラビア数字の打たれているのに気づいたJimといういばった子が、「見て、見て、ぼくたちの数字（＝英語の数字）を勝手に借りて使っているよ」と、さも大発見でもしたかのように自慢げに触れまわる。すべてをヨーロッパ起源と考えるそうした傲慢な西洋中心主義を批判して、それはアラビアからの借りもので、もともとヨーロッパのものではないと抗弁したいのだが、「そんな高度なことは言えないので私は黙っている」。その一方で、「片言しか知らぬ英語」ではうまく説明できず、そのとき言いたくて言えなかった *You ignominious ignoramus*（なんと無教養で恥知らずな）や *On the contrary*（反論させてもらうなら）（二一六頁）などの表現に、中学レベルでは決して用いられないラテン語起源の、のちに名門イエール大学へと進んだ美苗が、そこにおいて習得したであろう学術的な語句が、いくつか含まれていることに注意したい。⁽⁴⁾

ここにあるのは、「はなしことば」をもとに書かれる、中等教育レベルの平易でヴァナキュラーな英語と、ギリシャ語やラテン語、さらにはアラビア語などに起源する外来の学術用語を頻繁に駆使してはなされる、「書き言葉」を基軸とした高等教育（＝大学）レベルのアカデミックな英語との「隔たり」である。そしてその「隔た

り」はまた、日本語においても見いだされるものなのだ。

ジュニア・ハイスクールの教室で、ひとり孤独な読書にふける主人公の姿を描きだしつつ、テキストは一葉の『にぎりゑ』の一節を、次のように引いてくる。

何だとして此様な處に立つて居るのか、何しに此様な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違ひみた、我身ながら分らぬ、もうもう歸りませうとて横町の闇をば出はなれて夜店の竝ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶらぶら歩けば、行かよふ人の顔小さく小さく摺れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がやがやといふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、人の聲、我が考へは考へ、

（『私小説』一一五頁）

「将来子どもができたならその子はまちがってもアメリカには連れて来まいという、今となってみれば意味がないかもしれない決意」（一一四頁）をしていたころのその自分の想いを、場末の銘酒屋の酌婦へと堕ちてしまった主人公お力のやるせない想いに重ね合わせ、表象し、代行してみせる手際は、なかなかに見事だ。

それにしてもである。なぜわざわざ、明治の「原文」をそのままに、「舊漢字」にルビを振り、「歴史的假名遣ひ」の文面をそのまま引いてきているのか。戦後の国語改革によってもたらされた、「はなしことば」をもとに書かれるいまの日本語と、「書き言葉」を基軸とし、旧漢字、旧仮名遣いを念頭に置いてはなされたかつての日本語との「隔たり」が、まさにここにおいて集約的に示される。

「^かびの^お舞いの舞い立つ本には幸い古めかしい漢字にルビが振ってあった」(三三七頁)。だから明治の「原文」でも、少女の美苗は不自由なく読めた。だが一方で、「自分で漢字を書くとなると、日本語を書く機会もほとんどないままに小学校で習った漢字すら急速に忘れてしまい、いつしか自分の名前と子どもの頃くりかえし書いた東京の住所とだけしかすらすらと書ける漢字がなくなつて」(三三七頁)しまつていた。

読むことと書くことの、この決定的な非対称。読むことは比較的容易にできて、いざ書くとなると、その三倍の労力と鍛錬が要る。かくして美苗の書記能力は、小学生レベルで停滞したまま、その「書き言葉」への参入はお預けにされ、アメリカにおいて、このままアメリカの教育を受け続けるなら、英語によってしか「書き言葉」への参入をはたせない状況へと追いつめられていた。

結果どうなるか。しばしば、あこがれと称賛のまなざしでもってとらえられる^{バイリンガル}二言語併用とはちがつて、「はなしことば」と「書き言葉」が、それぞれ別の言語によって担われることで、自己の内部に言語的なねじれを生じ、その二つの価値観によって引き裂かれる事態——たとえば後に日本語の作家となつてアイオワ大学主催の国際創作プログラムに参加した際に美苗が出会った、あのバロングと同じような境遇へと追いやられていたかもしれないのである。

その挑発的なタイトルで物議をかもした評論書『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』(二〇〇八年刊)の第一章「アイオワの青い空の下で(自分たちの言葉)」で書く人々において、著者の水村美苗は、世界中からアイオワ大学に集まつてきた様々な作家との出会いを語る。その出会いの中で「とても気になる存在」として、アフリカ南部のボツワナからやって来たバロングは、最後に登場する。というのもバロングは、(自分たちの

言葉」で書いている（もしくは書くこうとしている）ほかの作家たちとはちがって、「（自分たちの言葉）」であるツワナ語で書かずに、英語で書いていた」（七〇頁）作家だからである。もしかしてそうになっていたかもしれない、かつての自分の似姿（＝分身）を、このとき著者の水村美苗は、バロロングのうちに見ていたにちがいない。そしてこのように言う。

今日、バロロングのような作家が「例外」なのは、サハラ砂漠以南のアフリカが、〈書き言葉〉をもたないまま西洋の植民地となったせいである。いいかえれば、それは、かつて「暗黒大陸」とよばれた、アフリカの「遅れ」のせいである。だが、歴史は、私たちの知らないあいだに、そのようなアフリカの「遅れ」を別のものに転じさせようとしているのかもしれない。

（『日本語が亡びるとき』七二頁）

「遅れ」が「別のもの」へ、すなわち国際共通語として絶大な力をもちはじめた英語に後押しされて世界の「最先端」へと転じてしまうアイロニカルな事態にどう対処すべきか。その処方箋を示すべく、多少のうとまじさと羨望の念をこめて、評論書『日本語が亡びるとき』が書かれてくる。

三、「近代日本文学」のテキストを読むこと

バロロングとは違う道を、結果として美苗は歩むこととなった。たまたま母が日本からもつてきて、ロングアイルランドの家に置いてあった改造社版の『現代日本文学全集』に収められた、明治から大正期にかけての小説テ

キスト（大正十五年刊のそれは舊漢字に總ルビで歴史假名遣ひが用ゐられていた）に深く沈潜し、その世界に耽溺する日々を過ごすことで、自学自習、自らの日本語能力を「書き言葉」のレベルにまで引き上げていったからである。⁽⁷⁾ そのようにして習得した日本語の「書き言葉」の基盤があるからこそ、だからこそ、のちにイエール大学へと進み、ギリシャ語やラテン語起源の学術用語や構文が頻繁に現われるアカデミックな英語の「書き言葉」にも対処することができた。⁽⁸⁾

ここからは、どのような問題が引き出せるか。

運命のいたずらがそうさせた、美苗のこの特異事例は、かつて植民地化された地域では、必ずしもあてはまらないということ、これである。母語としての〈自分たちの言葉〉は、いまだ「はなしことば」のレベルに留め置かれ、それに代わって「書き言葉」の領域は、かつての宗主国の言語がもっぱらこれを担うといった二重化された言語状況（高等教育機関＝大学の講義で使用される言語が、母語に基づく〈自分たちの言葉〉であるか、それとも旧宗主国からの借りものの、〈他者〉の言語であるかが、その端的な指標となる）が、それらの地域では常態化しており、その言語的なねじれがまた、様々な矛盾を引き起こし、ポスト・コロニアルの不安定な社会状況を、恒常的につくり出しているのである。⁽⁹⁾

そしてなんとも皮肉なことに、日本においては、「かながき論者」や「ローマ字論者」たちの長年の悲願であった国語表記法の改革が、戦後のどさくさにまぎれて、GHQ（連合軍総司令部）の後押しで強行され、結果、そうしたポスト・コロニアルな状況を、みずから率先して招きよせてしまっていた。「書き言葉」を旧宗主国の〈他者〉の言語に依存するという屈辱的な事態を、アメリカにあって美苗はかろうじて回避してきた。なのに二

○年ぶりに帰ってきてみれば、なんのことはない、日本は率先して屈辱的な地位にみずから追いやり、「名実ともに、ほとんどアメリカの植民地」（八八頁）となってしまうていたのだ。しかも外部の眼からみればほとんど自明のそうした事態を、当の日本人たちは少しも自覚せず、能天気なふるまっている。

ようやく高みへと昇ったそのせつかくのはしごを、勝手にはずされてしまったかのような、憤懣やるかたなき思いが基底にあつて、小説家水村美苗をして評論書『日本語が亡びるとき』を書かせるに至った。そうした経緯を、ここであらためて確認しておく必要がある。

四、〈文学〉の真理と、〈学問〉の真理

グローバリズムの進展とともに国際共通語としての英語の比重が増すなか、その話者人口がほぼ日本人に限られる、マイナーな孤立言語の地位に追いやられた日本語が、今後とも生き残っていくための方策を、水村美苗は、〈学問〉の言葉ではなく、〈文学〉の言葉に求めて、次のように言う。

実際、〈学問〉と〈文学〉が分かれたことによつてよりはつきりと見えてきたのは、この世の〈真理〉には二つの種類があることにほかならない。読むという行為から考えると、それは、〈テキストブック〉を読むばすむ〈真理〉と、〈テキスト〉そのものを読まねばならない〈真理〉である。そして、〈テキストブック〉を読めばすむ〈真理〉を代表するのが〈学問の真理〉なら、〈テキスト〉そのものを読まねばならない〈真理〉を代表するのが、〈文学の真理〉である。

(中略)

《文学》で見いだしうる《真理》は《テキストブック》に取って代えられることはない。そこにある《真理》は、その《真理》を記す言葉そのものに依存しており、その《真理》を知るためには、人は、誰もが、最終的には《テキスト》そのものに戻り、《テキスト》そのものを読まなくてはならないのである。

『日本語が亡びるとき』一九二頁、ただし傍点引用者

言葉は往々にして、《真理》を伝えるための単なる道具でしかないと考えられがちだ。道具でしかないから、伝達の役目を終えたあとは廃棄されて省みられない。大切なのは《真理》についての「情報」なのであって、それを伝える言葉ではない。その「情報」を、正確かつ効率的に伝達できるなら、その目的をよりよく達成できるなら、情報媒体としての言葉はどのようなものであっても（たとえ単なる符牒・記号のたぐいであつても）かわない。「学問の真理」の際たるものは数式で埋められた《テキストブック》（一九三頁）なのであるから。

《学問の真理》は言葉に多くを依存しない。ならばそれを伝えるのに、特段にすぐれた言語として英語が選ばとられたわけではない。だがその使用頻度は、今後ますます高まって、やがてすべての《テキストブック》を英語で書く時代がやってくるかもしれない。⁽¹⁰⁾ 現に自然科学の領域では（社会科学の領域でも？）、英語で論文を書くのがステータスとなっており、いまやそれが常態化している。⁽¹¹⁾

日本でいままで《学問の真理》を担ってきたのは、漢文訓読体に起源する「漢字カタカナ交じり文」であった。なぜ「ひらかな」でなく「カタカナ」か。日常生活から遊離した学問の世界は、空理空論をもてあそぶ時空間と

してイメージされがちで、それは絶えず外部性を担って捉えられる。外来語の表記にもつばら限定される現在の「カタカナ」の用法（コンピューター用語やビジネス用語、さらにはファッション用語も加わって、その滑稽なまでの濫用ぶりは、ほとんど戯画の様相を呈している）は、その名残であろう。⁽¹²⁾しかし文字は単なる音声の写しでしかなく、その音声を正確に写し取ることができるのであれば、文字はどれであつてもかまわないのなら、外来語は極端な話、それを日本語の構文にまじえて、たとえば水村美苗が『私小説』において実践してみせたように、アルファベット表記のまま残しておいてかまわない。そこでは、より効率的で汎用性のある文字が、いや文字だけでなく、より効率的で汎用性のある言語が、優先的に選ばとられる。グローバリゼーションの進展著しい現在にあつて、それは英語以外に考えられない。

だが〈文学〉の領域においては、すべてを英語に置き換えて、翻訳を通して享受することではすまされない。水村の著書では使われないが、ここで「情報」という言葉をあえて用いるなら、文学においては、媒体としての言葉それ自体が「情報」としての価値をもつ。ならば、価値ある「情報媒体」としての日本語を、つまりは水村のいう〈読まれるべき言葉〉を、文学の営みを通して、今後もなんとか死守していかなければならない。⁽¹³⁾「〈文学〉で見いだしうる〈真理〉は〈テキストブック〉に取って代えられることはない」のだから。「そこにある〈真理〉は、その〈真理〉を記す言葉そのものに依存しており、その〈真理〉を知るためには、人は、誰もが、最終的には〈テキスト〉そのものに戻り、〈テキスト〉そのものを読まなくてはならない」からである。

〈テキストブック〉でこと足りる〈学問の真理〉と、〈テキスト〉でしか伝えられない〈文学の真理〉。水村が重視するのは、もちろん後者の〈文学の真理〉の方である。とはいえその主張は、英語の圧倒的な力の前で、劣

位に置かれた日本語が生き残る道は、唯一そこにしかないとする悲しい認識に基づいている。

ところで筆者水村美苗が〈文学の真実〉と区別して〈学問の真理〉といった場合、そもそも人文学のテキストのことが視野に入っていたのかどうか。アリストテレスの『詩学』のテキストを〈テキストブック〉に置き換えてすまずことのできない〈読まれるべき言葉〉のひとつに数え入れている以上、水村のいう〈文学〉は、それを人文学のテキストに置きかえて理解することもできるはずだ。¹⁴

そしていささか樂觀的に過ぎるとのそしりを覚悟の上で、〈文学〉のたすけを得て〈学問〉が基礎付けられ、また〈学問〉に助けられて〈文学〉の質が底上げされるその媒介項としての、もしくは転轍機としての〈人文学の営み〉の重要性に、ここであらためて着目しておきたい。そして急いで付け加えておくなら、水村美苗の評論書『日本語が亡びるとき』にしているからが、すぐれて〈人文学の営み〉に他ならず、だからこそというべきか、それは「ヨコ書き」ではなく、断固「タテ書き」でもって記されねばならなかったのだ。

五、「音声」ロゴス中心主義のわな

『日本語が亡びるとき』は、実にすばらしい本だ。言語に関する多くの知見を、惜しみなく読者に与えてくれる。だがそうした中で、なんととはなし釈然としないのは、先に見た、〈テキストブック〉——それは昨今ますます英語で書かれる傾向にあるのだが——を読めばすむ〈真理〉として、〈学問の真理〉を位置づけている点である。〈文学の真理〉との対比でいわれたにしても、それでは、文字を単なる音声の写しとしかみない「音声」ロゴス中心主義¹⁵、さらにはその「音声」ロゴス中心主義¹⁶を背景に世間一般にひろまっている、「情報」を運ぶ入

れ物としか言語をみないいわゆる言語道具観を、それと意識しないままは認してしまう結果となる。

だが、文字を音声の写しとしかみない「音声＝ロゴス中心主義」は、水村もいうように、「西洋のように音文字を使う文化が、歴史を通じて、性懲りもなく、くり返し、くり返し、到達せざるをえない誤った言語観」(三七八頁)なのである。⁽¹⁵⁾ ならば《学問の真理》にその「誤った言語観」をあてはめ、英語で書かれた《テキストブック》への代替可能性をいうのは、少しく論理的整合性を欠く。戦後の国語改革を後押しした思想的背景にもこの「誤った言語観」があった。日本語の危機はまさにそこにこそ胚胎するとするのならなおのこと、《文学の真理》と同等かそれ以上に、《学問の真理》も《テキスト》に依存しており、英語で書かれた《テキストブック》に代替して済ますことなど、とうていできないと主張すべきだった。⁽¹⁶⁾

私たちの思考の奥深くには、つねにすでに「音声＝ロゴス中心主義」が巣食っている。ともすればそれがおもてにあらわれ、ものごとの判断を狂わせる。だが歴史的に見れば、むしろ文字の方が先行し、音声や思考(ロゴス)はあとからそれを追いかける関係にあった。「書き言葉」の成熟なくして、「はなしことば」の成熟もありえないのだ。そのことを見ようとしなない「音声＝ロゴス中心主義」は、文字を軽視することで、結果として「書き言葉」の質的低下を招き、人々の思考力を退化させ、文化破壊をもたらす。⁽¹⁷⁾

ジャック・デリダによる「音声＝ロゴス中心主義」への批判も、そうした危機意識から発せられたものであった。⁽¹⁸⁾ ただしその危機意識は、必ずしも表音文字のアルファベットを用いるヨーロッパ諸語に向けられたものではない。西欧列強による過酷な植民統治の結果、「書き言葉」の役割を、宗主国のヨーロッパ諸語に横領されてしまった非西欧のオリエンタルな地域にこそ向けられたものだった。この間の事情を説明して、バーバラ・

ジョンソンは次のように言っている。⁽¹⁹⁾

デリダが主張するように、文字言語の重要性が西欧の主要な文化伝統において「抑圧」されてきたのは、文字言語がつねに「他者」の手に渡る可能性があるからである。「他者」はつねに、他者を抑圧しにかかるメカニズムを読み解く方法を学びうる。したがって、エクリチュールを抑圧せんとする欲望とは、「他者」の抑圧、と言う事実を抑圧する欲望にはかならない。

(傍点引用者)

表向き音声言語としての「はなしことば」の先行性を主張して、植民地支配の対象たるオリエンタルな「他者(＝高貴な野蛮人)」を、その「はなしことば」のレベルにとどめおき、封じ込める。一方で、宗主国言語としてのみずからの「書き言葉」の優位性をひそかに温存し、植民地支配にあたつてパブリックな領域でこれを最大限有効活用する。「他者」の抑圧と言う事実を抑圧する」その二重に屈折した抑圧構造を通して、結果としてかつてのイギリスの植民地では「英語」が、かつてのフランスの植民地では「フランス語」が、そしてかつてのポルトガルやスペインの植民地においては「ポルトガル語」や「スペイン語」が、「はなしことば」のレベルにとめおかれたヴァナキュラーな現地語にとつて代り、パブリックな「書き言葉」の地位に居座つた。そうすることで、現地語の「書き言葉」への昇格を阻害し、抑圧した。⁽²⁰⁾

そしていままた英語が「音声」ロゴス中心主義に助けられ、他の言語(そこには他のヨーロッパ諸語も含まれる)を押しつけて、〈学問の真理〉を語る「書き言葉」の地位をひとり占めしようとしている。アルジェリア

出身のデリダは、フランス語圏に属しながら、植民地に生を享けた。だからこそ「音声＝ロゴス中心主義」の影に隠された、宗主国による「書き言葉」の横領という事態に、敏感に反応した。デリダには、『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』の著書のあることを思い起こそう。だが〈他者〉の言語としてのそのフランス語も、いまや英語に取って代われ、〈学問の真理〉を担う「書き言葉」の地位から急速に転落しつつある。⁽²¹⁾

「音声＝ロゴス中心主義」の伝統は、日本においても根強い。それは江戸期の国学にまでさかのぼる。たとえば本居宣長は、自身、〈学問〉のことばとして、「漢文」や「漢字カタカナ交じり文」を自在にあやつる能力にたけていながら、漢字を排除して仮名だけで文章を綴ることを、盛んに推奨していた。⁽²²⁾

近代文学研究の領域において最大のテーマとされる「言文一致体」の創出にしながら、「音声＝ロゴス中心主義」に影響された運動であった。いわゆる方言という形で地域や階層による「言（＝はなしことば）」の多様性があり、一方で「漢文」や、それに準ずる「漢字カタカナ交じり文」がある。加えて「漢字ひらがな交じり文」や、そこから漢語を排除して「ひらがな」のみで書かれた女房消息のような文体もあったといった、さまざまに分化した「文（＝書き言葉）」が併存する多言語状況は、明治という時代が要請する近代国民国家の創設過程で早急に淘汰され、集約されなければならなかった。学校で、工場で、兵営で、平準化された同じ言葉が読まれ、話されなければならなかった。⁽²³⁾

そうした時代の要請に、どれだけ自覚的であったかは疑わしい。とはいえ「言文一致体」の創出へ向けた運動は、おもに文筆をなりわいとする新聞記者や小説家によって担われた。その際、「言」と「文」のどちらに基盤

を置くのか、つまり「言」を「文」へと近づけるのか、それとも「文」を「言」へと近づけるのかで、様々な試行錯誤がなされ、三遊亭田朝の口述筆記などが参照されたりもした。⁽²⁴⁾

だが実のところ、問題はそんなところになかった。現に大学では、お雇い外国人の下で、「原書^{げんしょ}（起源として価値付けられたこの用語も、いまではほとんど死語に近い）」を用いた講義が行われ、そこでの使用言語は、いうまでもなく英・独・仏の西欧語だった。この状況が続けば、日本が西欧の言語植民地となることは必至だ。そこで争われていたのは、だから、〈学問〉の世界を従来から担ってきた、「漢文」や「漢字カタカナ交じり文」の伝統を、西洋語に取って代わられることなく持続させ、存続させていくための努力なのであった。

その際に効力を発揮したのが「翻訳」という行為であった。

デカルトがラテン語と並行して『方法序説』を当時の俗語で書き、ルターが『聖書』の俗語訳を試みて、それまで日常卑近な「はなしことば」のレベルにしかなかったヴァナキュラーなフランス語やドイツ語を、パブリックな領域をもカバーする「書き言葉」へと鍛え上げ、底上げしていったように、福沢諭吉や西周をはじめとする明治期の知識人たちによる西欧語文献の「翻訳」を通して、「漢字カタカナ交じり文」がその語彙を増やし、構文上の論理性を一層高めて、近代国民国家の「国語」に見合う「書き言葉」へと、みずからを鍛え上げ、昇格させていったのである。そうした「翻訳」の作業の過程で新たに造語された言葉や構文の数々を、それと意識しな
いまま、いまの私たちは、日々の暮らしに欠かせない語彙や用法として活用しており、ならばその恩恵には、は
かりしれないものがある。⁽²⁵⁾

六、大東亜共栄圏下のあるべき日本語

「言文一致体」と並行して、「翻訳」による新たな文体を創出することで、欧米列強によって植民地化された他の地域のように、「書き言葉」の領域が旧宗主国の〈他者〉の言語によって横領されてしまう危機を、日本はかろうじてまぬがれた。あまやかな文学の徒には見えてこない、そうした言葉をめぐる熾烈なバトルが、実は背景としてあったのだ。

だがそのことを少しも自覚せず、〈自分たちの言葉〉としての「日本語を大切にしよう」との気概を持たぬ、自国語に対する自虐意識にとらわれた現下の日本人たちへのいら立ちを募らせつつ、水村美苗は次のように言う。

日本人が「日本語を大切にしよう」という気がないのは、もっと深いところに原因があり、その原因自体、さらに深いところに原因があり、また、その原因自体、さらに深いところに原因がある。

（『日本語が亡びるとき』二六五頁）

いくつもの「原因」をつきつめたその先に、諸悪の根源ともいうべき「音声＝ロゴス中心主義」に基づく「表音主義」があぶりだされてくる。その論点を整理するなら、まずは以下の三点に集約される⁽²⁶⁾。

一、大東亜共栄圏におけるアジア侵略に伴って、皇民化教育として「日本語」の押し付けがなされたことへ

の自責の念があること。

二、「書き言葉」より「はなしことば」を重視し、「はなしことば」さえできれば自由に読み書き可能なよう漢字制限を課し、仮名遣いも表音式にあらためた戦後の民主化運動の影響がいまだに尾を引いていること。

三、西洋言語学によりもたらされた表音主義、すなわち「書き言葉」は「はなしことば」を単に文字化したものにすぎないとする「音声＝ロゴス中心主義」が、いまだに多くの人々によって信奉され続けていること。

そして最後に四点目として、四方を海にかこまれた「日本列島の地理的条件」が挙げられる。

四、周囲を海で囲まれ、いままで異民族の侵略を免れてきたため、支配民族（宗主国）による〈他者〉の言語の押し付けという事態の生ずることへの危機感が、まったくないこと。

旺盛な翻訳活動を通して宗主国言語による「書き言葉」の横領という事態はかろうじてまぬかれたものの、その後の日本は、帝国主義列強に伍して、その一員として、みずから植民地化した地域への宗主国言語（＝日本語）の押し付けという憂鬱な事態を、逆のかたちで反復してしまう。その間の経緯については、イ・ヨンスク『「国語」という思想』に詳しい。⁽²⁷⁾

新たな植民地の獲得により、日本語市場は活況を呈し（支那にやあ四億しおくの民が待つ！）、そのますますの拡充発展が期待された。⁽²⁸⁾ そうした時代の要請にこたへるべく論陣を張ったのは、皮肉にも、「舊漢字」を多用し「歴史的假名遣ひ」を遵守する伝統的な表記法を重んじた、いわゆる「国粹主義」に凝り固まった、頑迷な保守派ナシヨナリストの方では必ずしもなかった。そうではなくて、文字は音声の写しにすぎないのだから、いま現に使われている「はなしことば」に即して、より平易な表記法へと国語を改変していくべきだとする「かながき論者」や「ローマ字論者」などの、いわゆる開明派インタナショナルの表音主義者たちの方なのであった。日本語で書かれた出版物を「大量生産工業製品」（ベネディクト・アンダーソン）として世界市場マーケットにより広く流通させるためにも、そこで用いられる日本語は、植民地化された現地の住民にも容易に学ぶことが可能な、平易で取っつきやすいものに、あらかじめ原理的に「改造」しておかなければならなかった。そこでのスローガンはだから、西洋に追いつけ追い越せの「近代化」と、帝国主義的な領土拡大にともなう日本語の「植民化」なのであった。まさしく、「善意の道は地獄へ通ず」といふべきか。

この時期、たとえば次のような主張も一方でなされていた。⁽²⁹⁾

實ニ他ノ歐米諸國ニ見サル國字改良漢字、廢止、言文一致羅馬字採用等ノ議論紛出ニ見ル如ク國民全部ノ大苦惱ハ日本ノ言語文字ノ甚タシク劣惡ナルコトニアリ。其ノ最モ急進的ナル羅馬字採用ヲ決行スルトキ幾分文字ノ不便ハ免ルベクモ言語ノ組織其者ガ思想ノ配列表現ニ於テ悉ク眞理的法則ニ背反セルコトハ英語ヲ譯シ漢文ヲ讀ムニ凡テ日本文ガ顛倒シテ配列セラレタルヲ發見スベシ。國語問題ハ文字又ハ單語ノミノ問題ニ非ズ

シテ言語ノ組織根底ヨリノ革命ナラサルベカラズ。

(北一輝『國家改造法案原理大綱』)

かくして北は、エスペラント語を大日本帝国の「第二国語」として採用し、それを大東亜共栄圏へと拡張された日本の支配領域の国際共通語にすべきだと主張する。こうした発言を誇大妄想と笑ってすますわけにいかない。表音主義者のみならず、北のような右翼イデオログにまで、かくも繰り返し「表音文字」のアルファベットが推奨され、その一方で「表意文字（正確には表語文字というべきだが）」の漢字が、蛇蝎のごとく嫌われるのはなぜなのか。

留学帰りの東大教授上田^{かずとし}万年によって西洋から移入された当時最先端の言語学が、文字を音声の写しとしかみない「音声＝ロゴス中心主義」の立場をとっており、加えてスペンサー流の社会ダーヴィニズムの影響を受けて、ついには克服され淘汰されるべき未開野蛮な文字として、「表意（語）文字」の漢字を位置づけていたからである。しかもその対極には、どういうわけか西洋人の使う「表音文字」のアルファベットが、究極の進化型としてもっともすぐれた文字体系に位置づけられていた。折悪しくも漢字発祥の地である中国は、当時、全土が半植民地化され、その混乱状態から容易に抜け出せない状態にあった。漢字のごとき未開野蛮の原始的な文字を、いまだに使い続けていることに、その原因の一端が求められた。

ならばなんとしても、漢字とは縁を切らねばならない。そうでなければ、日本の近代化（西洋化）はとうていおぼつかない。そうした強迫観念にとらわれて、「かながき論者」や「ローマ字論者」が、性懲りもなく次々と現れてくる。日本語の「近代化」と「植民化」を、そのスローガンにひっさげて。

さて問題は、そうした「かながき論者」や「ローマ字論者」の生き残りが、国語審議会（文部省の諮問をうけて国語問題全般を検討し協議する有識者たちの集まり）の主要メンバーに居すわって、強引に推し進めた、戦後の国語改革である。

七、敗戦処理としての戦後の国語政策

水村のあげる四点目の項目に該当する事態が、幸か不幸か、つい最近になって日本人を見舞った。第二次世界大戦に敗れ、日本はGHQ（連合軍総司令部）によって七年間の占領統治をうけたのだ。その過程で再び日本語の「書き言葉」のあり方が、問われることとなった。支配民族による言語の押し付けは、必ずしも一方的な強制という形で行われるとはかぎらない。奴隷根性から抜けだせない支配される側の隷属・追従という形でも、それはなされる。日本語を廃棄してフランス語にしてしまえと暴論を吐いた文学者もいたそうだが、占領統治されたあの時期に、いっそのこと日本語を、まるごと英語に置き替えておけばよかった、などと考えるやからが、昨今ではますます増えていきつつある勢いだ。⁽³⁰⁾

GHQの言語政策に後押しされ、勢いづいた、「かながき論者」や「ローマ字論者」たちの、戦後における錦^{にしき}の御旗^{みはた}は、このたびは「民主化」と「国際化」であった。言語の「民主化」とは、近代国民国家を構成するすべての国民が駆使できる日本語、その日本語で自由に読み書きできるような新たな「言文一致」の創出であった。その際にやり玉に挙げられたのが、難解な（とGHQの将校たちには思われた）漢字、それも膨大な数にのぼる「舊漢字」の存在であり、また「はなしことば」の音声からズレた「歴史的假名遣ひ」の煩瑣な（と表音主義者

たちには思われた) ルールであった。いっそのこと漢字を全廃して文字は「かな」だけとし、「はなしことば」の音声⁽³¹⁾を忠実になぞる形に仮名遣いを改めて、その表音文字としての特性を最大限に活かしていく方向が示された。

彼らは言う。日本人ならだれでも日常的に日本語をはなしているのだから、その「はなしことば」をそのままに文字に写せばよい。いやいやその文字も五十五音しかない「かな」ではまだ不十分で、いっそのこと、より正確な表記が可能な音素記号のローマ字にしてしまえばよい。そうすれば、「主婦はもちろんのこと、鋤をもった農民や、サイレンの音と共に工場入りをする労働者」(『日本語が亡びるとき』三七九頁)でさえもが、自由⁽³²⁾に日本語の読み書きができるようになるはずだとの、左翼イデオロギーからする「善意」の思い込みが、戦後になってさらにそれをバックアップする。結果、たとえば次のような表記法が、その目指すべき理想の文体として賞揚されたのである。

一体、禁酒禁煙とゆーことわ出来るが、節酒節煙わ出来ないとおなじで漢字の節減わどーも六かしい。これで、従来⁽³³⁾の障害お、一洗しよーとゆーことわ、国語教育百年の大計でない。単に過渡時代における一時の方便に過ぎないものである。真に国語教育百年の大計おおもーなら、漢字わ全く廃止して、しまわなければならん。

さらにはまた、福沢諭吉の『学問ノス、メ』をもじって「Roomazigaki nippongo no susume」と題された、

つぎのような表記の試みもなされ、積極的に推奨された。⁽³³⁾

Gendai no nippongo wa kanzi-kanamaziri to iu kimyouna kakiarawasikata o site iru tame ni, iroiroto yakkaina mondai o kakakonde iru. Sekkaku konpyutaa to iu benrina kikai ga arinagara, sono nouryoku o zyuubunni ikasu koto ga dekinai no de aru.

一気に漢字を全廃し、ローマ字化を押し進めるのは、さすがに無理がある。そこで当面の暫定的な措置として、まずは漢字の使用制限（当用漢字表の制定）を課すとともに、省画の略体字の採用を断行した。加えて「はなしことば」の音声からズレてしまった「歴史的假名遣ひ」に替え、新たに「現代かな使い」を定め、一層の表音化を押し進めた。とはいえ「てにをは」や、いわゆる「四つ仮名」（じとぢ、ずとづの使い分け）における「歴史的假名遣ひ」の例外的な使用が、当面は容認されたため、その二重化された規準ゆえの混乱が生じた。また、「ふ頭」「わい曲」「しっ責」「ろっ骨」「めい福」などのまぜ書きが不評を買い、地名や人名などの固有名に対する漢字の使用制限への不満の声などもあって、その後は使用の「目安」としての常用漢字表へと大きく後退し、ワープロの普及による漢字変換の容易さから、使用文字数は拡大の一途をたどっている（ワープロソフトのローマ字変換に、かろうじてローマ字化の痕跡を見て取ることもできようか）。

ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』は、第二次世界大戦後の冷戦構造のもと、東西の緊張が高まった一九四八年に書かれた作品で、一九四八年をひっくり返して一九八四年とすることで、三〇数年後の未来に舞台

を想定し、自由を抑圧する全体主義国家（ソ連に代表される社会主義体制が想定されている）を痛烈に批判した、ユートピアならぬデストピア小説である。その「一九八四年」もとうの昔に過ぎてしまい、加えて一九八九年のベルリンの壁崩壊に始まる社会主義圏の雪崩を打った解体消滅により、アメリカ主導の自由主義市場経済が全球的規模へと拡大した現在にあつては、その《読まれるべき言葉》としての価値を失ってしまったかに思われる。だが、「付録」として末尾に掲載された「ニュースピークの諸原理」の一章は、安易な言語政策に警鐘を鳴らす批判の書として、いまだ学ぶべき多くの示唆に富む。

現行の標準英語である旧語法オールドスピークを廃棄し、それに代わる全体主義国家「オセアニア」の「公用語」として、「イングソック即ちイギリス社会主義のイデオロギー的要求に應えるべく考案された言語」がニュースピークである。人工言語としてのニュースピークは、大きくA語彙群、B語彙群、C語彙群の三つに分かれ、それぞれ人文学、社会科学、自然科学の語彙に対応している。そして人文学に関連したA語彙群については、次のような説明が（34）されている。

動詞と名詞との語形の間にはそれが同一の語根から出てさえいれば何らの異同もなかった、この法則はそれ自体、多くの古い語形を破壊する結果にもなったのだ。例えば思想ソートという一語はニュースピークには存在しなかった。考えるシンクという一語が取って代わり、名詞にも動詞にも使われたのである。ニュースピークでは語源学上の原則は採用されていなかった。つまり、留用語として選ばれるのは原型の名詞であつたり、動詞であつたりする場合があつた。よく似た意味を持つ名詞と動詞とは、例えば語源学上の関連性がなくても、その

いずれか廃棄される場合が多かった。例えば**切**^{カット}というような単語は存在しなかった。その意味がナイフという名・動詞によって充分に伝達されたからである。
(傍点引用者)

表音文字のアルファベットを用いていても、現行の標準英語（旧語法）^{オールドスピーク}は、必ずしも表音主義に即していない。「歴史的假名遣ひ」と同じで、*knife* や *high* のように、綴字と発音とがズレる例はいくらかもある。フランス語の表記法はもっと煩雑で、「音声＝ロゴス中心主義」のまやかしであることは、この一事をもつてしても明らかだ。それに対しニュースピークは、現時点での利用の便宜を最優先に、歴史の中でその言語が担ってきた、実際の発音からズレた伝統的な表記法をいっさい無視し、表音主義にもとづく省力化と合理化を徹底的に推し進める。ならばこれを、国語審議会の場でなされた改革案のパロディととらえることも可能だ。単なる伝達の道具としか書字行為^{エクリチュール}をみない双方の発想のあまりの類似に、奇妙な既視感を覚えずにいない。

「民主化」や「国際化」と引き換えに、戦後の国語改革が結果として人々にもたらしたのは、いったいなんであったか。漢字制限を課すことで、「書き言葉」としての日本語の質を中学レベルへと引き下げ（昨今の若者の漢字の読み書き能力の低下には目に余るものがある）、仮名遣いを表音化することで明治大正期をも含めた古典テキストを「原文」では読めなくさせ（歴史的假名遣ひがネックとなり若者たちの古典嫌いがますます助長された）、過去の文化や伝統との断絶を人々に強い（あるいは過去のしがらみから人々を自由^{自由}に解き放ったというべきか？）。

幸い（？）なことに、日本語の表記を、より「平易」なものとすることで、「民主化」（ゆとり教育に象徴され

る初等中等教育現場での平等主義の尊重）や、「国際化」（バブル経済期に盛んにとなえられた外国人を対象とする日本語教育の普及拡大）を計ろうとする動きは、その後、様々な方面からの抵抗に逢い、不徹底で中途半端な形のまま現在に至っている。

国語審議会による戦後の国語改革に激しく抵抗し、その結果、左翼陣営から保守反動のレッテルを貼られて様々な嫌がらせをうけた文芸評論家の福田恆存は、国語表記法に関してあまた書かれた自己の論考を締めくくるに際し、次のような文章を末尾に書きつけて、その暗澹たる思いを吐露している⁽³⁵⁾。

かうして幾多の先學の血の滲むやうな苦心努力によつて守られて來た正統表記が、戦後倉皇の間、人々の關心が衣食のことにかかづらひ、他を顧みる餘裕のない隙に乗じて、慌ただしく覆されてしまつた、まことに取返しのつかぬ痛恨事である。しかも一方では相も變わらず傳統だの文化だのといふお題目を竝べ立てる、その依つて立つべき「言葉」を蔑ろにしておきながら、何が傳統、何が文化であらう。なるほど、戦に敗れ、といふのはかういふことだつたのか。

（傍点引用者）

「〔自分たちの言葉〕であるツワナ語で書かずに、英語で書いていた」バロングに、みずからの似姿（＝分身）を見た水村美苗の危惧を、はるかに先取りして、同じく英語とのかかわりの深い福田（英語圏への遊学体験があり英文学者としてシェークスピアの翻訳にも積極的になぞさわった）にして、この奮闘のあったことを、長く記憶にとどめておきたい。

八、ふたたび「タテ書き」と「ヨコ書き」のはざまで

敗戦国の苦渋は、言語面での植民地化をもたらす。ならば先の福田の危惧は、かならずしも過去のものとなっていない。

そこにあるのは、「はなしことば」をもとに書かれることで、限りなく薄められ、根無し草にされてしまった戦後の日本語と、「書き言葉」を基軸にはなされたことで、歴史と伝統とにシッカリ下支えされ、裏打ちされていた、かつての日本語とのあいだに介在する「隔たり」であり、その「隔たり」から生ずる違和感が、筆者水村美苗をして、ときに激しい物言いへと駆りたてる。たとえばこんなふうにして。

日本に帰って、いざ書き始め、ふとあたりを見回せば、雄々しく天をつく木がそびえ立つような深い林はなかった。木らしいものがいくつか見えなくてもいいが、ほとんどは平たい光景が一面に広がっているだけであつた。「荒れ果てた」などという詩的な形容はまったくふさわしくない、遊園地のように、すべてが小さくて騒々しい、ひたすら幼稚な光景であつた。

（『日本語が亡びるとき』七六頁）

そして日本では、いままた従来の「タテ書き」を凌駕する勢いで、人々のあいだに「ヨコ書き」が浸透し、教育現場での英語の准公用語化の動きともあいまって、その傾向はますます加速度を増す。ブローのごとく効いてきて、それはやがて日本語の基盤を掘り崩すだろう。世はまさに、「日本語が亡びるとき」を迎えている。⁽³⁶⁾

先にもみたように、水村美苗の自伝的小説『私小説 from left to right』は「ヨコ書き」で書かれている。それについては水村自身、「英語の言葉や文章がところどころに入った小説——大げさにいえば、バイリンガルな小説です。（中略）このバイリンガルの形式を通じて、先ほどお話しした、世界で露わになりつつある、英語と英語でない言語との非対称性を明らかにしたいと思いました」（一一七頁）と述べるのみで、それ以上に多くを語っていない。先にもみたように、アメリカかぶれの姉の奈苗の口から延々と繰り出されるアルファベット表記の英語の会話をそのままに、頻繁に引用してくる必要から、「ヨコ書き」にせざるをえなかった事情ももちろんある。だが問題は、もっと別の所に求められる。

思うにその「ヨコ書き」には、英語に取り巻かれ、その重圧に押しつぶされそうになりながら（すなわち、おのれの「書き言葉」の領域が英語によって浸食され、横領されてしまう事態にさらされながら）、日本語の「書き言葉」（皮肉にもそれは舊漢字を用ゐ歴史的假名遣ひで書かれたひと昔前の日本近代文學のそれであつたのだが）に固執し、孤軍奮闘する主人公のけなげな姿を、アイロニカルに表現してみせる効果が期待されていた。圧倒的な「英語の世紀」の中で劣位に位置づけられた日本語の、それはまさしく、ミニチュアの自己像（戯画像？）でもあつたのだ。それが証拠に、水村美苗の以後の小説作品はすべて、その挑発的なタイトルで物議をかもした評論書『日本語が亡びるとき』も含め、従来の慣行に即して、「タテ書き」なのである。

ついでには、当初の問いに立ちかえり、『日本語が亡びるとき』では見過ごされてしまった、その「ヨコ書き」の現時点での位置づけについて、最後にあらためて述べておきたい。

九、日本語の未来へ向けた新たな処方箋

私たちは現在、「タテ書き」と「ヨコ書き」を併用し、用途によってそれを使い分ける。数式なども入ってくるからであろう、自然科学の領域においては、もっぱら「ヨコ書き」が主流である。社会科学の分野でも、「タテ書き」よりは「ヨコ書き」が、最近では主流になりつつある。これを要するに、「ヨコ書き」とは、言葉そのものに依存することはないと考えられた〈学問〉の〈真理〉を、後世に伝えるための入れ物でしかなく、たとえばそれが「誤った言語観」にもとづく誤った選択だとしても、その最終的な到達点は、水村の言うように、簡にして要を得た〈テキストブック〉への置き換えなのだ。現に中等教育の現場においては、「国語」以外の他の教科のほとんどが（なんとみずから「歴史の科学」たらんとした日本史までもが！）「ヨコ書き」の教科書を用いている。

しかし日本においては、依然として「タテ書き」の優勢な領域が、ひとつだけ残されている。人文学である。それが humanities の訳語である以上、西洋から移入された翻訳学問としての限界は、当然のこととしてある。とはいえ人文学は、言葉それ自体を問題化する。それどころではない。人文学の営みそれ自体が言葉に依拠している。ことばと骨が、らみのその営みを簡略化して、別の言葉へと置き換え、〈テキストブック〉で代替させることなどできようはずもない。そして人文学のこの特性を活かし、その存在意義を高めていくためにも、この領域においては、今後とも「タテ書き」が、断固死守されなければならない。⁽³⁷⁾

考えてみれば日本語は、「タテ書き」にも「ヨコ書き」にも充分適応可能な自由度の高い書記様式の言語で

ある。⁽³⁸⁾ ならば分野によって「タテ書き」と「ヨコ書き」を使い分け、ときにそれを併用して、巧みな組み合わせを工夫することで、新聞、雑誌、書籍等の活字媒体や、様々な広告媒体において、多様でバラエティに富んだ紙面構成が可能となる。「ヨコ書き」以外の書式など、とうてい考え及ばない欧米語に比べ、これは最大の利点であろう。

「タテ書き」にも「ヨコ書き」にも対応可能なこの柔軟性は、漢字文化圏に共通のもので、必ずしも日本語だけの特性ではない。とはいえ、近代化の圧力（手放しの肯定）のもと、中国や韓国における、新聞、雑誌、書籍類の、なし崩しの、節操なき「ヨコ書き」への追従とは一線を画して、日本ではまだまだ「タテ書き」の需要は高い。⁽³⁹⁾

思えば日本は、新たにもたらされた外来のものと、今まであった在来のものとのあいだで矛盾対立が顕在化したとき、両者を巧みに使い分けることで和解共存させる文化を、その長い歴史と伝統のなかで培ってきた。外来のものと在来の間を棲み分けさせることで、そのつど臨機応変に対処してきたのである。西洋とちがって必ずしも弁証法的ではない、この巧みな「使い分け」や「棲み分け」を、「タテ書き」と「ヨコ書き」にも適用すべきではないだろうか。⁽⁴⁰⁾

「タテ書き」と「ヨコ書き」双方で文章を書かせ、その結果えられた学生たちの感想を、石川九楊はその著『日本語とはどういう言語か』で次のように要約している。

縦書きについては、「文字が次々と流れるように書ける」、そして、「文がまとまりやすい」。つまり文がまと

まりやすいという意味で、書きやすいと答えたのである。むしろ逆に、「重い」「苦しい」「文が硬くなる」「文体が古くさくなる」という感想もあった。横書きについては、意外にも否定的な意見が多かった。曰く「箇条書きになる」「文が長くなる」「どこまでも書けそう」、そして圧倒的に多かったのは、「文がまとまらない」「文がしまらない」、つまり、横書きの「書きやすさ」は気軽に言葉が浮かび、話しがどんどん広がっていくという点に限られた。

(八一頁)

from top to bottom (上から下へ) と書き進む「タテ書き」に、石川は、天から地へと向かう文字の宗教性を見いだしている。したがって「横書きは、この天に対する戦略を欠いた、重力線を横断する書法であり、雨のごとくに降る重力線をひたすら突き切り、走り抜けるところの書字法」でしかなく、ために、「次々と話題は浮かびやすいが、ついつい筆が走り、まとまりを欠いた文とならざるをえない」(八二頁)と否定的だ。なんのことはない、軍配は始めから「タテ書き」の方にあがっている。

だが「タテ書き」については、逆も考えられよう。たとえそれが、まとまりを欠いた、とりとめのない駄文であつても、「タテ書き」にしてしまえば、その文字の宗教性に助けられ、なんとなくしまりがあり、まとまりのある、重々しい文章に見えてしまう。そんな安易なごまかしが、「タテ書き」だと、往々にして許されてしまう。ならばあえて「ヨコ書き」を選びとることで、構文の論理性を際立たせる努力をしてみても良いはずだ。⁽⁴¹⁾

水村のいう〈読まれるべき言葉〉としての〈テキスト〉と、別の言葉に置き換え可能な〈テキストブック〉の違いは、「タテ書き」にされた際のテキストの文字の不透明性と、「ヨコ書き」にされた際の文字の透明性とに対

応する。その対比はまた、水村が繰り返し強調する、文字表記における「他の何物にも還元できない物質性」(一九頁)、「どんなに読者数が少ない言葉で書いても、その行為自体に意味を与える言葉の物質性」(二二〇頁)へのこだわりを導き出す⁽⁴²⁾。

《読まれるべき言葉》としてのテキストにおいては、情報として「何が書かれているか(『シニファイエ』)ではなく、媒体として「どのように書かれているか(『シニファイアン』)」が重視される。だが、シニファイエ(ことばの意味される側面)ではなくシニファイアン(ことばの意味する側面)へのこうした重点移動は、テキストの言葉の物質性が邪魔をして、伝えるべき「情報」の精度が落ち、ゆがみ、かたよることも通ずる。「タテ書き」の文章がかかえもつこのアポリアは、対象として「文」を論ずることと、みずからも「文」たろうとする哲学、思想、評論、批評文の、いうところのミイラ取りがミイラになってしまふ困った事態をも招来する。

ならばどうするか。いささか逆説めくが、みずからが「文」たることを断固拒否し、それを極力排除すること。すなわちあえてする「ヨコ書き」の採用こそが、あるべき選択肢として、いま求められている。たとえば地の文は「ヨコ書き」を基本とし、古典テキストからの引用は、これを横に寝かせて「タテ書き」にする。国語学や国文学研究の領域にあっても例外でない。「タテ書き」の文章の中で欧文をヨコに寝かせて引用する従来の慣行(本稿もその慣行に従っているわけだが)の、これは逆バージョンである。そうすることで、《対象言語》としての古典テキストを、《分析言語》としての現代のコンテキストから論じ、対象化する、そのオブジェクトレベルと、サブジェクトレベルの位相差が明確に区分され、差異化される。対象とする古典テキストの情緒性に、論述の文章が引きずられ、みずからそれに感染して、なし崩しに癒着、縫合が生じてしまうという不都合な事態が、

これによって避けられる。

誤解されると困るのだが、水村のいう〈読まれるべき言葉〉としての価値をこれからも維持し、担っていかねばならない、哲学、思想、歴史叙述、評論、批評、戯曲、小説、詩歌等の、みずからも「文」たらざるをえない、もしくは率先して「文」たろうとする〈人文学の営み〉にあつては、今後とも「タテ書き」を断固死守していかなければならない。それをしも「ヨコ書き」にシフトさせたとき、日本語はたやすく英語へと置き換えられ（なにしるその方が、格段に国際的であり、民主的——別の言い方をすれば大衆迎合的^{ポピュリズム}であつて、より広範な汎用性を持つのだからして）、水村の危惧するように、今度こそ本当に「亡びる」。

注

- (1) ジョージ・オーウェル『一九八四年』（ハヤカワ文庫、一九七二）。
- (2) 『私小説』のメタ・フィクション性については、著者みずから『日本語が亡びるとき』において、「ブルースト以来、すなわち、『失われた時を求めて』以来、「いかにして私は作家になったか」を物語る小説が、世界中に、洪水のように溢れるようになりました。『私小説 From left to right』も数知れぬそのような小説の一つだといえましょう」（一一五頁）との説明がされている。
- (3) 『私小説』が単なる自伝的小説にとどまらず、そこでの主題が日本語と英語の葛藤にあることについては、『私小説 from left to right』は、韓国語、ベンガル語、フランス語など、ほかのどの言葉に訳しても、英語の部分を残し、バイリンガルの形式を再現することができるとです。この小説を唯一訳すことができない言葉は英語なのです。（中略）そしてその唯一の可能性こそが、今日の世界にある、言語のあいだの非対称性の、もっとも明確なあかしなのです」（二一八頁）との説明が、『日本語が亡びるとき』の中でなされている。
- (4) 『私小説』（三二八頁）には、イエール大学で日本近代文学のゼミナールを聴講した際のエピソードが語られており、芥川龍之介の小説「舞

踏会」に selective ignorance (選択された無知) を読みとる日系アメリカ人たちのアイデアに、多大な感銘を受けたことが記されている。そして「ignorant & ignorant の類義語 ignorance の見えていることに注意しておきたい。

- (5) 『日本語が亡びるとき』では「二重言語者」という語を用いて、「バイリンガル」とは、日本語では、二ヶ国語を話せるという意味合いが強い」のに対し、「二重言語者」は「自分の〈話し言葉〉とはちがう外国語が読める人を指す。読むという行為を中心に、人間の書き言葉にかんして考えていきたいからである。自分の〈話し言葉〉しか読めない人は「単一言語者」である」(一三六頁)と説明されている。

- (6) このバロロンクという作家は、「バロロンクの家族がどのような階級に属するのかわからないが、独立後、家族と共にしばらくイギリスに住み、ロンドンの中学校で学んだというから、それなりに上の方であろう」(『日本語が亡びるとき』七一頁)と説明されており、その経歴が十二歳でアメリカに渡りアメリカの教育を受けた著者とよく似ている。

- (7) 「私がアメリカにも英語にも背を向けて読んでいたのは、母が母自身の伯父から譲り受けた日本語の近代文学全集である。一九二六年(大正十五年)に発行された改造社の『現代日本文学全集』で、それまでの本に比べて破格に安い一冊一円という値段で、円本ブームを引き起こした出版物として日本近代文学史のなかで重要な意味をもつ」(『日本語が亡びるとき』一二四頁)との説明がある。『私小説』に引かれた『にじりゑ』の文章も、この全集本からの引用と思われる。

- (8) 日本の秋を題材とした英語の作文を、ジュニア・ハイスchoolの教師に褒められたエピソードが『私小説』(二四八頁)にみえ、「言い古された心の動き、言い古された表現——ひょっとして押れ合いでしかない感受性のようなものが、別の言葉に翻訳された時には新鮮な意味をもちうる」ことを発見する。その体験はやがて、ギリシャ・ローマの伝統を引き継ぐアメリカの大学のアカデミズムの世界にあつて、自己の独自性を示すための足場を形成したにちがいない。

- (9) バロロンクが置かれたポスト・コロニアルな状況については、「ボツワナには、ツワナ語で書く作家と英語で書く作家と両方おり、両者のあいだには緊張感がある。中学校時代をイギリスで送り、英語で書く方が得意になってしまったというバロロンクは、英語で書いていたが、あたかも、民族的裏切りの罪を償おうとでもするかのように、創作のかたわら、ツワナ語のことわざを英語で翻訳したりしていた」(『日本語

が亡びるとき」七一頁）との説明がされている。

- (10) 他の言語を凌駕して英語が〈普遍語〉の地位を獲得するに至ったのは、インターネットの普及によるところが大きい。インターネットの世界では英語が「メタ言語」として機能している。『日本語が亡びるとき』はその点を指摘して、「インターネットは世界で英語が〈普遍語〉として流通するのを強化する技術だが、そのインターネットという技術にかなしてのメタ言語も、英語という言語なのである。世界中の人々はインターネットについて語るとき英語を使う」（三四頁）との説明がされている。

- (11) こうした水村の理解には、後に述べるように「音声＝ロゴス中心主義」からの影響が見てとれる。それに抗するものとして、たとえば松尾義之『日本語の科学が世界を変える』（筑摩選書、二〇一五）などが挙げられよう。松尾は自然科学の領域において日本語に基づく関係性の重視が新たな知見をもたらした事例を挙げ、それを高く評価している。

- (12) 石川九楊『日本語とはどういう言語か』（講談社学術文庫、二〇一五）は暫定的な借り物としての特質をカタカナ表記にみて、「とりあえず置いておける」、「いったん置いておく」、「とりあえず書きとめておく」、「中間的に受け止めておく」（二二二頁）にすぎないものとらえ、さらに「カタカナ語の世界に入り込んで、翻訳することや採否のいかんを考えずに、ともかく浮かして、時代とともに行くというのが、いまの企業が生き残るいちばんの算段のようです。（中略）いま儲かっている企業は大半がカタカナ語の浮遊体企業です。それはカタカナ語の役目です。だからカタカナ語が氾濫するのです」（二八頁）と、皮肉なたっぷりな物言いをしている。

- (13) 『日本語が亡びるとき』第五章「日本近代文学の奇跡」では、漱石の小説『三四郎』を題材に、西洋から移入された学術研究の紹介や翻訳に終始する機関として日本の帝国大学を位置づける。大学を去って新聞社に籍を移した漱石の選択も、そこに理由があったとする。

- (14) アリストテレスのテキストが英語で享受される時代の到来を予測して、『日本語が亡びるとき』では、「英語の世紀に入り、〈学問〉が英語に一般化されるにつれ何がおこるか。それらの専門家も、アリストテレスにかなして何かを書くときは、〈自分たちの言葉〉で書かずに英語で書くようになる。すると、アリストテレスの引用も、〈自分たちの言葉〉に翻訳したものではなく、英語に翻訳したものを使うようになる。その結果、アリストテレスにかなして書かれたものが英語で流通するようになるだけでなく、しだいに、アリストテレスの〈テキス

ト)そのものが、英語で流通するようになるのである」(三二六頁)と危惧の念を表明する。なお本書のカバーデザインには、英語に翻訳されたアリストテレス「詩学」の文面が背景に用いられており、そこに著者一流のアイロニーをみてとる必要がある。

- (15) 石川九楊は『日本語とはどういう言語か』の中で、西洋におけるアルファベットの使用と「音声＝ロゴス中心主義」との結びつきを説明し、「アルファベット言語圏においては、音声中心の言語を形成する。もちろん一〇〇%ではありません。五〇・一%、音声を中心とすると考えてください。これに対して漢字言語圏においては、五〇・一%、意味を中心とした言語を形成すると考えればいいでしょう。おそらく西欧と東アジアを対比した場合、この音声中心の言語と、文字・書字中心の——もう少し正確に言えば、筆蝕中心の——言語との相違が、決定的なものではないかと思えます。(中略)わずか〇・一%の違いです。〇・一%の違いで、位相がガラッと変わるのです」(一三一頁)と述べている。

- (16) 公平を期するため言っておかなければならないが、その後、著者の水村はこの点の齟齬を認め、『日本語が亡びるとき』(ちくま文庫、二〇一五年)の「文庫版によせて」において「自然科学と母語の関係、そして、翻訳文化の重要性」という一項を設け、「実体」よりも「関係性」を重視する日本語の思考が、自然科学の分野において新たな知見をもたらす可能性について言及している。注(11) 松尾前掲書と関連して、「学問の真理」における〈テキスト〉の重要性を、改めて確認する発言として注意しておきたい。

- (17) 「書き言葉」の質的低下について『日本語が亡びるとき』は、「文化の否定というイデオロギーのそもその種は近代西洋のユートピア主義にあり、それは、原始共産制礼賛、文化的資産を持つ者と持たざる者との差をなくそうとするポピュリズム、社会の規範からまったく自由な〈主体〉の物象化など、さまざまな形をとって、西洋でも文化の破壊を招いてきた」(三八〇頁)と述べ、その具体的事例として、中国の文化大革命やカンボジアのクメール・ルージュを挙げる。本稿のエピグラムにも掲げ、この後にも言及することとなる小説『一九八四年』で、作者オーウェルが描き出した全体主義の悪夢を、これに付け加えることもできよう。

- (18) ジャック・デリダ『根源の彼方に——グラマトロジーについて』(現代思潮社、一九七二)は、はやくに「音声＝ロゴス中心主義」を批判した書として、すでに古典的な位置づけにある。

(19) バーバラ・ジョンソン「エクリチュール」(『現代批評理論—22の基本概念』平凡社、一九九四)。

(20) 宗主国言語と植民地の現地語とが混在した言語は、一般に不純なものとされる。石川九楊は『日本語とはどういう言語か』においてそれを擲論し、「たとえば東南アジアを中心とするところの、英語がそれぞれの地方の言葉と交じり合ったいわばインチキ英語という意味でビジンという言い方があり、中南米を中心としたスペイン語圏で、スペイン語と地元の言葉とが交じり合ったいわばインチキスペイン語というような意味でクレオールという言い方があります」(二四二頁)と皮肉な物言いをしている。だがその伝いけば、かつて腐ったドイツ語と忌避されたイデュツシュ語と等しく、日本語もまたインチキ混成言語なのである。さらに言えば金谷武洋「述語言語の日本語文法を主語言語の英文法で記述する愚行」(『Tichio』一二七号、二〇一五年夏)の指摘にもあるように、ノルマンの侵入によりフランス語に限りなく侵犯された英語もインチキ混成言語であり、そうでない言語など、むしろめったに存在しないのである。

(21) デリダ『たった一つの、私のものではない言葉—他者の単一言語使用』(岩波、二〇〇一)。デリダは本書で、フランス語という「他者の単一言語使用者」であることを強いられたフランス—マグレブ人で、なおかつユダヤ系の自己の集団が、ペダン政権下、一方的に市民権を剝奪され、しばらくして再び与えられるという恣意的あつかいがされたことへの、告発とも、苦情とも、悲哀ともつかぬ複雑な感情^{mourning}を吐露している。なおフランス語の凋落については、『日本語が亡びるとき』の第二章「パリでの話」に詳述されている。

(22) 日本語から漢字を排除する発想の原点を宣長に見て、石川九楊は、「宣長あたりから漢語と和語を分離して考えるようになります。中国から来たものと、日本にもともとあるものとがあると誤解して考え、中国的なものを取り去れば、この島にもともとあったものの、和的なものが抽出されるはずだという考え方が出てきます。(中略)もともとこの島には美しい和というものがあって、そこにさかしらな漢が大陸から入ってきたものだからそんなものは排除すればいいという、この「美しい和」という幻想をとまなう二元性の幻想を生むのです。これが近代のナショナリズムと綺麗にくっついていったわけです」(二二六頁)と述べ、さらに「日本近代に始まる国語学や言語学は、漢語と漢詩と漢文との衝突とそれらをモデルにすることによって八世紀に(新たに)作られた倭語と倭詩と倭文を孤島にもともと「あった」と考える誤謬を犯している。つまり、現在日本の言語学は、本居宣長のやまところの思想と西欧音韻・語順言語学の麗しき結婚の上に成立しており、さらにこ

れに加えて「国語」概念への誤謬が複雑な学を生んでいる」(六五頁)と痛烈な批判を展開している。

- (23) 文字以前の音声へと還ろうとするこうした運動は、正確には『古事記』の序文や『古今和歌集』の仮名序にまでさかのぼる。なお言文一致体について『日本語が亡びるとき』では、「言文一致体とは新しい文章語であり、少しむずかしい言い方になるが、従来の文章語に比べて、言語の修辭学的機能(極端な例としては「言葉遊び」)よりも言語の指示機能(意味を指し示す機能)を優先させた文章語なのである」(三八頁)と述べ、それが西欧語を翻訳する営みを通して達成された成果であることを強調している。しかしその物言いには、例によって「音声」ロゴス中心主義」の微妙な影が見てとれる。

- (24) 『文学』(一四卷二号、二〇一三/四月号)の「三遊亭円朝」特集に収載された諸論考を参照のこと。

- (25) 明治期の翻訳が果たした役割の重要性については、『翻訳語成立事情』(岩波新書、一九八二)をはじめとした柳父章の一連の翻訳論によって、高い評価が与えられている。

- (26) 以下の四項目は、第七章「英語教育と日本語教育」の三六六頁から三九一頁にかけての著者水村美苗の主張の要約である。

- (27) イ・ヨンスク『「国語」という思想』(岩波現代文庫、二〇一二)。

- (28) ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』は、近代国民国家の起源を知る際の古典的名著として位置付けられているが、アンダーソンの注目した出版資本主義と言語とのかわりについては、『日本語が亡びるとき』の第三章「地球のあちこちで〈外の言葉〉で書いていた人々」に詳述される。

- (29) 前掲注(27)のイ・ヨンスク『「国語」という思想』は、この北の発言を受けて、「劣悪ナル」日本語は朝鮮民族に強制することはできても、その他の「好良ナル」国語をもつ民族、とくにヨーロッパ人には強制できないというのである。それほどまでに「劣悪」な日本語を強制された朝鮮民族は、なんとみじめな犠牲の羊になったことだろう」と皮肉な物言いをしている。

- (30) ビジネス界の求めに応じた英語公用語化の動きはその典型である。そこで求められているのはアメリカ主導の自由主義市場経済を駆動させるためのビジネス英語であって、文化としてのそれでは決してない。

- (31) この間の経緯については、土屋道雄『國語問題論争史』（玉川大学出版、二〇〇五）に詳細な関連資料の紹介がされている。
- (32) 保科孝一『国語教授法指針』（宝永館書店、一九〇二）。なお前掲注（27）のイ・ヨンスク『国語』という思想¹は、上田万年の後継者として国語政策を主導したこの保科孝一の活動を通して、帝国主義下の植民地の言語政策を痛烈に批判する。
- (33) 梅棹忠夫『日本語の将来——ローマ字表記で国際化を』（NHKブックス、二〇〇四）による。なお本書の末尾には、参考資料として「社団法人ローマ字会」の手になる「九九式 日本語のローマ字表記方式」という文書が掲載されている。「零式」戦闘機を思わせるその時代錯誤のネーミングには、批判を通りこして苦笑を禁じ得ない。
- (34) 前掲注（一）オーウェル『一九八四年』（ハヤカワ文庫、一九七二）。
- (35) 福田恆存『私の國語教室』（文春文庫、二〇〇二）。
- (36) 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫、一九七六）第二部第一章二節「日本語のヨコ組みはなぜ読みにくいか」および三節「目玉理論の「二つ」のまちがい」、外山滋比古『近代読者論』所収「縦と横」（外山滋比古著作集2、みすず書房、二〇〇二）などに、「ヨコ書き」に対する否定的な見解が示されているが、どれも説得力に欠ける。なお屋名池誠『横書き登場』（山岩波新書、二〇〇三）によれば、懸額などに見られる右ヨコ書きは、上下が狭まって一字のみの「タテ書き」がそうだったもので、通常考える「ヨコ書き」とはその出自が異なる。
- (37) 『日本語が亡びるとき』に「人文学」への言及がないわけではない。しかしそれは、「英語への一極化は、すでに自然科学を越え、社会科学、人文科学へと、今は緩慢に、しかし確実に（学問）の中で広がっている」（三二五頁）、「人文科学でも、意味のある研究をしている研究者ほど」、「英語でそのまま書くようになりつつある」（三三二頁）、「もし漱石が（中略）自然科学ではなく人文科学という分野に身を置き、英語で（テキスト）を書きたいという抱負をもったとする」（三三六頁）などのように、「人文学」の領域もまた容赦なく英語に侵犯されつつあるとの文脈で言われたものに限られる。
- (38) 石川九楊は『日本語とはどういう言語か』で、「水平書き」がもたらした字形変化として、「一九七〇年代。少女たちが生み出したいわゆる

「丸文字」＝「漫画文字」や、「一九八〇年代半ばから現在、直線的な字画を寄せ集めたイラスト風の細身の「シャープ文字」の誕生」をあげ、「日本語を今後も水平書きし続けるなら、漢字もひらがなもカタカナも、とりわけ続け字・分かち書き用の女手（ひらがな）は、規範を新しくつくり変えねばならない。そこまでする必要はないと考えるなら、日本語において垂直書きを取り戻す必要がある。現在不断に見かけるごちない文字の姿はそれを訴え続けている」（九七頁）と述べ、いかにも書家らしく、書体の変化から「ヨコ書き」の弊害を指摘している。

(39) 東アジア漢字文化圏において「タテ書き」がまだに生きているのは、旧字体の漢字を使用する台湾ぐらいのものであろう。なお台湾と親密な関係にある香港や澳門については今後の調査に俟ちたい。

(40) 柄谷行人は『戦前』の思考』（講談社学術文庫、二〇〇二）で、日本文化におけるこうした双系的な性格を、漢字と仮名のエクリチュールの違いに求めている。

(41) 石川九楊は、「ヨコ書き」書式の西欧語の論理性を高く評価し、「アルファベットは東アジアの漢字のような文字ではなく、発音記号のごとき文字である。この構造の言語においては、書く以前の話す（内言）段階ですでにまとまりを有^もっている。西欧語の場合は、書く以前の（垂直に）話す言葉の中に、すでに神を宿し、まとまり＝文体を有している」（八二頁）と述べる。書字行為以前に潜在する神への垂直的な宗教性がその論理性を支えているとするなら、「ヨコ書き」をあえて選ぶことで、日本語においてそれを実践努力する必要があるはずだ。

(42) 文字の「物質性」への着目は、水村が師事したポール・ド・マンに先駆的な発言がある。詳しくは土田知則『ポール・ド・マン―言語の可能性、倫理の可能性』（岩波書店、二〇二二）の第六章「文字の物質性」を参照のこと。ただしド・マンがその物質性を強調するのは、当然のことながら表音文字のアルファベットにおいてであり、「文字の物質性」の端的なあらわれともいうべき漢字の表意性やひらがなの図像性については、なんら問題にしていない。

*本文および注の中の引用文と頁数は、それぞれ、水村美苗『私小説 from left to right』（ちくま文庫、二〇

○九）、同『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』（ちくま文庫、二〇一五）、石川九楊『日本語とはどのような言語か』（講談社学術文庫、二〇一五）からのものである。